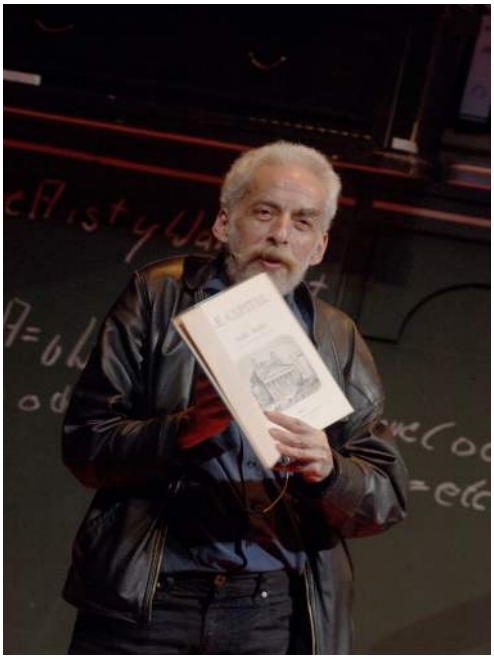
F/T09 フェスティバル/トーキョー
PRESS RELEASE

『カール・マルクス：資本論、第一巻』
演出：ヘルガルド・ハウグ、ダニエル・ヴェツェル
（リミニ・プロトコル）【ドイツ】

2 月 26 日（木）～3 月 1 日（日）
於：にしすがも創造舎



(c) Sebastian Hoppe

脱力系、革命エンゲキ？
アート界きっての戦略家集団リミニ・プロトコル、
20 世紀のバイブル『資本論』を携え再上陸！

お問合せ：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207
制作担当：クラウトハイム・ウルリケ u-krautheim@anj.or.jp F/T 広報担当：及位（のぞき）、ハッセル toiawase@anj.or.jp

作品について

ドキュメンタリー演劇の手法で爆発的人気を誇るアーティスト集団リミニ・プロトコル。08 年東京公演でも大旋風を巻き起こした『ムネモパーク』に続いて早速の再来日が実現！

リミニ流、「エキスパートによる演劇」

リミニ・プロトコルが発明した「エキスパートによる演劇」、それはプロの俳優ではなく、あるテーマに関するエキスパートがキャストとして舞台に登場するというもの。舞台上で語られる様々なエピソードは、彼らの経験や知識のもとに構成された「戯曲」でもある。今回、舞台に登場する 8 名の人々もプロの役者ではなく、いわば「資本論に関するエキスパートたち」、あるいは一見するとフツーの一般人たちだ。このキャストを見つけるために、ハウグとヴェツェルは 1 年間をリサーチに費やし、ベルリン・チューリッヒ・デュッセルドルフの 3 都市で実に多くの人々と面談、インタビューを実施した。自分の人生の一部をこの書物に捧げた人、内容や構成を熟知し今日も『資本論』を活用している人、『資本論』に対して生半可な知識あるいは偏見をもつ人、あるいはまったく無知・無関心の人…それぞれが『資本論』との多様な関わりをもっていた。

今回出演する 8 名のキャストたちは、それぞれ『資本論』とともに社会主義/資本主義のただ中で人生を歩んできた人々。マルクス主義経済史家、エリツィンの通訳も務めた翻訳家、盲目のテレフォン・オペレータ、革命を信じるアクティビスト、などなど。彼らは自らが専門としない演劇という舞台の上で、政治的にも社会的にもそれぞれ異なる立場から、分厚い『資本論』を片手に自らの人生を語りだす。

100 年後の『資本論』

カール・マルクスが『資本論』を執筆してから 1 世紀以上が経った今日、20 世紀を変えた究極のベストセラーは、私たちの生活にどのようなリアリティをもたらしているのだろうか？　それがハウグとヴェツェルの最初の問いかけだ。この大著を実際に読んでいる人はどれだけいるのだろうか？　もしいるとしたら彼らは、いったいなぜ、どんな事情で読んでいるのだろうか？

『資本論』から 100 年たった今、世界には驚くべき現実が氾濫している:
共産主義国家を標榜する中国では、資本主義が猛威をふるっている。テレビをつければ、アディダスのトレーニング・ウェアを着たカストロ姿が見える。トリアにあるマルクスの生家には観光客があふれ、「カール・マルクス赤ワイン」が飛ぶように売れている・・・。

この舞台は社会主義の葬送行進曲でもなく、舞台上の理論作りでもない。ハウグとヴェツェルは、大胆不敵にもカール・マルクスの著作と全く同じタイトルの作品を、決して大文字の歴史には顔を出さない個々人の人生から描きだしていく。

東京バージョンについて

今回の東京公演にあたっては、リミニ・プロトコルのメンバーが事前に来日し、『資本論』に関係する人々にインタビューを実施。今日の日本における『資本論』受容のあり様を知る一方で、日本公演に出演してくれる何人かのエキスパートを選定した。奇しくも日本でも蟹工船ブームが起こるなど、格差社会に対する問題意識が強まっている昨今、この特別東京バージョンは、日本のリアルをどう映し出すか、注目が集まる。

アーティスト・プロフィール

ヘルガルド・ハウグ / ダニエル・ヴェツェル （リミニ・プロトコル）
Helgard Haug / Daniel Wetzel (Rimini Protokoll)

リミニ・プロトコルは、ギーセン大学応用演劇学科で出会ったヘルガルド・ハウグ（1969 生）とダニエル・ヴェツェル（1969 生）、シュテファン・ケーギ（1972 生）の 3 人によるアートプロジェクト・ユニット。2000 年、フランクフルトで結成された。お互いが独立し、個人のプロジェクトを発表している一方で、メンバーの 2 人、もしくは 3 人のプロジェクトも多く発表している。

結成以降、特に公共空間におけるパフォーマンスやドキュメンタリー演劇の手法を用いた型破りなプロジェクトの数々で世界の注目を集めている。彼らの作品の出演者はプロの俳優ではなく、あるテーマに関して特別な経験や知識を持っている一般の人々。稽古前に行われるリサーチあるいはキャスティングのプロセスが、実に作品創作の 2/3 を占める。このように、現実を演劇的に描くのではなく、ある現実をそのまま舞台上にあげるという驚くべきシンプルな手法によって、リミニ・プロトコルはヨーロッパで爆発的人気を誇っている。2004 年以後はベルリンのヘッベル劇場を拠点としながらも、世界中で精力的にプロジェクトを展開中。

おもな受賞歴

- 2002 年 『Shooting Bourbaki』で Impulse フェスティバル賞受賞
- 2005 年 『ムネモパーク』で「政治と自由演劇フェスティバル」で審査員賞受賞
- 2005 年 『Schwarzenbergplatz』でネストロイ演劇賞の特別賞にノミネート
- 2007 年 『カール・マルクス：資本論、第一巻』でミュールハイム戯曲賞及びオーディエンス賞
- 2007 年 リミニ・プロトコルの活動で、ファウスト演劇賞（特別賞）
- 2007 年 『Peymannbeschimpfung』が「今月のベストラジオドラマ」に選ばれる
- 2008 年 プレミオ・ヨーロッパ演劇賞（部門：演劇におけるニュー・リアリティー）
- 2008 年 『カール・マルクス：資本論、第一巻』のラジオドラマ版で Hörspielpreis der Kriegsblinden ラジオドラマ賞

出演者プロフィール

トーマス・クチンスキー　Thomas Kuczynski

1944 年ロンドン生まれ。大学で統計学を専攻し、卒業後 1968 年～1991 年経済統計学者としてドイツ民主共和国（旧東ドイツ）における経済科大学（Hochschule für Ökonomie）、その後学士院の経済史研究所に所属し、1988 年～1991 年には最後の所長を務める。ベルリンの壁崩壊後、1991 年～1998 年フリーランスと失業の間に暮らす。1998 年以降フリーランスのライターや編集者として活躍。刊行物：1981 HANDBUCH WIRTSCHAFTSGESCHICHTE（共著者、共編集）; 1985-90 GESCHICHTE DER PRODUKTIVKRÄFTE IN DEUTSCHLAND VON 1800 BIS 1945（共著者、共編集）; 1995 DAS KOMMUNISTISCHE MANIFEST VON MARX UND ENGELS. MIT EINEM EDITIONSBERICHT; 2004 BROSAMEN VOM HERRENTISCH. HINTERGRÜNDE DER ENTSCHÄDIGUNGSZAHLUNGEN AN WÄHREND DES ZWEITEN WELTKRIEGS NACH DEUTSCHLAND VERSCHLEPPTE ZWANGSARBEITSKRÄFTE

ウルフ・マイレンダー　Ulf Mailänder

1956 年ビュンデ（旧西ドイツ）生まれ。ベルリン自由大学をドイツ文学及び政治学を学ぶ。無断居住、編集者やオータナティヴ出版社（Stattbuchverlag）の経営責任者といった「政治運動」を展開。数年間ドロップアウトし、カナリア諸島のラ・パルマに滞在した後、ゲシュタルト心理学を学び、資格を得る。1992 年からベルリンにおいてフリーランス著者及び専門家として活躍。様々な刊行物、ユルゲン・シュナイダー、ハンス・ヨアヒム・セレンツ、ユルゲン・ハルクセンなどの自伝の共著者。

タリヴァルディス・マルゲーヴィッチ　Talivaldis Margevics

1946 年リューベック（旧西ドイツ）生まれ。リガ大学において史学、レニングラード大学においてジャーナリズムを専攻。それ以降主に映画監督として活動、現在まで映画を 40 本以上を発表している。一時的に、織物工場での荷造り人、学校の先生、大学講師、ラトヴィア首相のアドヴァイザーとしても活動。

ヨヘン・ノート　Jochen Noth

1941 年ベルリン生まれ。マインツ、ハイデルベルク、パリの大学においてロマン文学及びドイツ文学を勉強。1963 年からドイツ社会主義学生連盟（SDS）のメンバー、一時的にその理事も務める。西ドイツ共産主義連盟（Kommunistischer Bund Westdeutschland）の中央委員会設立委員。1979 年～1988 年中国、ラジオ北京の編集部及び外国語大学の講師。1989 年以降ベルリンにおいて中国を専門とするコンサルタントやアドヴァイザー、並びにアジア・パシフィックマネジメント研究所の経営責任者。様々な刊行物の著者。

クリスティアン・シュプレムベルク　Christian Spremberg

1965 年ハンブルク生まれ。ハンブルグ、フリードベルク、マールブルクの盲学校において勉強。高校卒業の後、マールブルク大学でドイツ文学を専攻、1991-92 年中退。その後マールブルク公共職業安定所に電話交換手として勤める。1995 年～2002 年ベルリンシュプレーラジオ局の編集部員。2003 年以降ベルリンのコール・センターにテレフォン・オペレータとして勤める。

ラルフ・ワルンホルツ Ralph Warnholz

1960 年デュセルドルフ生まれ。機械工の養成を受け、夜学において更に電子工学の修業を積む。1974 年から 12 年間にわたりギャンブルに溺れる。8 年前からデュセルドルフ・ギャンブル依存症の自助グループの指導者。

サシャ・ワルネッケ Sascha Warnecke

1986 年ラーティンゲン（旧西ドイツ）生まれ。高校生の時から大型スーパーでアルバイト。現在メディア商業の研修生。2007 年からデュセルドルフ専門単科大学において「社会的仕事」を学ぶ。2003 年からドイツ共産主義党の党員。同党員と一緒にドイツ労働者青年を再設立。

フランツィスカ・ツヴェルク Franziska Zwerg

1969 年ベルリン生まれ。ベルリンフンボルト大学とモスクワ大学でドイツ文学、スラヴ文学と演劇学を学ぶ。卒業以降ロシア語翻訳家としてフリーランスで活動。ボリス・エリツィン元ロシア首相の自伝や、Irina Denezkina や Elena Tregubova の小説の翻訳者。

特別寄稿

カール・マルクス：資本論 第一巻

マティアス・リリエンタール （ベルリン HAU 劇場（Hebbel am Ufer）芸術監督）

現在の国際金融危機を背景に、リミニ・プロトコルの作品『カール・マルクス：資本論 第一巻』を見ることは、ほとんど考えられないことになっている。というのも、現代の経済に関して確実だと思っていたことのすべてが、目下、ひっくり返っているからだ。皆さんがこの文を読んでいる時、経済の状況は多分、またしても変わっていることだろう。

ヘルガルド・ハウグとダニエル・ヴェツェルは、資本をテーマにしたこの舞台で、これこそドイツの古典だという作品への接近に挑戦した。舞台化のさい、彼らがまさに避けようとしたのは、何十年もドイツでなされてきたこと、つまり、この書物を読みなおすことである。

ハウグとヴェツェルは、彼らの作品『カール・マルクス：資本論 第一巻』のために、カール・マルクスによる未完成の代表作の第一巻に何かを見出せるような人々を探しに行った。この人々は、難解なテキストに対して、自分たちのユーモアや経験を提供したり、これらをテキストに織り込んだり、理論との関わりを断ち切ったり、ストーリーに移行したりする（そのストーリーは舞台上〈だけ〉のものであっても）。

マルクスは、もしかしたら、アジアにおける孔子のようなものかもしれない。多くの人がマルクスをまったく読んでいないかもしれないのだが、にもかかわらず、マルクスは私たちのメンタリティに影響を与えている。ヘルガルド・ハウグとダニエル・ヴェツェルにとって、この本は戯曲のテキストであり、その謎は、この本とともに／のなかで／のために生きてきた 8 人の人々の助けによってのみ、解かれうる。これは社会主義の葬送行進曲でもなければ、舞台上の理論作りでもない。この作品の場合、演出がこれをどう読むかということではなく、いったい誰がこれを読んだのかということが問題である。この本の内容よりも、現代社会においてこの本がどんな位置を占めているのか、誰がそれを使用し、知っているのか、ということが主題なのであって、政治的なカラーや経済的な実践は問題ではない。

リミニ・プロトコルはラトヴィア人の映画監督の生い立ちを語る。彼はつい最近、かつて自分の母親が彼をすんでのところで売り渡してしまいそうになったことを知った。戦時中にドイツから避難する際、母親はポーランド人農婦から、パンや卵、牛乳を提供された。母子はその食糧なしには生き延びられなかった。母親は断ったが、にもかかわらず、彼女は食糧を手にした。あるいは、東ドイツ出身の老人クチンスキー氏がいるが、その父親（顔が驚くほど似ている）は、彼編集の、現在までよく知られている『資本論』の青い装丁本で東ドイツ国民を〈幸せにした〉。あるいは、ハンブルク出身の投資コンサルタントは金持ちのハンブルク市民の財産をネズミ講で増やし、このネズミ講システムが破綻した。一方、社会主義学生連盟の元メンバーの生い立ちもある。彼は毛沢東主義に関わったあと、ドイツ・中国間で経営者のキャリアを築いた。こうした生い立ちのすべてから、最終的にある全体像がまとまり、この『青本』が現在、なお何を意味しうるのかが示される。

リミニ・プロトコルのプロジェクトの特徴は、〈リアリティのエキスパート〉あるいは〈専門家〉を使った／との作業である。彼らの出発点は、実際に未知のものとは、もはや 60 年代のようにオーストラリアのアボリジニーではなく、自分と同じ町に住んでいる人間だ、ということである。舞台上の人々は、演劇に関しては素人だが、素人としてではなく、彼ら自身を演じる俳優として登場し、アーティストたちには、エキスパート、またはレディー・メイド俳優と呼ばれている。俳優たちは、戯曲のテキストではなく、自分自身を演じる。そのさい、テキストや進行は、彼らそれぞれの生い立ちや職業に基づいて構成される。リミニのリサーチの対象には、例えば死のプロセスも、F1 サーキットのメカニックも入りうる。今回の作品『カール・マルクス：資本論 第一巻』はその意味で、リミニ・プロトコルにとって理想的な素材である。この本ほど、よく知られていながら、知られておらず、読まれていない書物もないだろう。
彼らは無限の好奇心を日本でも展開し、日本の人々の生い立ちを探しに行くだろう。それとも、もしかしたら、やはりマルクスを読むことにして、その中に、もうひとりの孔子を発見することにするのだろうか。

マティアス・リリエンタール　Matthias Lilienthal

1959 年ベルリン生まれ。1978 年から大学で演劇学、歴史学及びドイツ文学を学ぶ。1986 年から演出助手やフリーランスライターとして活躍。1988 年～1991 年バーセル劇場でドラマトゥルク。1991～1998 年ベルリン・ヴォルクスビューネのチーフドラマトゥルク及び副芸術監督。1999 年からフリーランスとしてドラマトゥルク・ライター。2003 年にベルリン HAU 劇場（Hebbel am Ufer）の芸術監督に就任。

キャスト/スタッフ

コンセプト・演出	ヘルガルド・ハウグ Helgard Haug、ダニエル・ヴェツェル Daniel Wetzel
リサーチ・演出助手	セバスティアン・ブリュンガー Sebastian Brünger
出演	トーマス・クチンスキー Thomas Kuczynski （統計学者、経済家、現在編者） ウルフ・マイレンダー Ulf Mailänder (コーチ、施設コンサルタント) タリヴァルディス・マルゲーヴィッチ Talivaldis Margevics （歴史家、映画作家） ヨヘン・ノート Jochen Noth （経営コンサルタント、講師、中国・アジア専門） クリスティアン・シュプレンベルク Christian Spremberg （コールセンター・エージェント） フランツィスカ・ツヴェルク Franziska Zwerg （翻訳家、通訳 ） ラルフ・ヴァルンホルツ Ralph Warnholz （公共電気技師、元ギャンブラー） サシャ・ワルネッケ Sascha Warnecke （革命家、メディア業界のセールスマン） 他
舞台美術	ヘルガルド・ハウグ Helgard Haug、 ダニエル・ヴェツェル Daniel Wetzel ダニエル・シュルツ Daniel Schulz
ドラマトゥルグ	アンドレア・シュヴィーター Andrea Schwieter イマヌエル・シッパー Immanuel Schipper
舞台監督	ヨヘン・フェネス Jochen Fenes
照明	コンスタンティーン・ソネソン Konstantin Sonneson
ビデオ・アシスタント	ミハエル・コッホ Michael Koch
ビデオ・アシスタント協力	マーティン・ハセンエール Martin Hasenoehrl
製作	デュッセルドルフ市立劇場 Düsseldorfer Schauspielhaus
共同製作	ヘッベル劇場ベルリン（HAU）, チューリッヒ市立劇場 Schauspielhaus Zuerich, フランクフルト市立劇場 schauspielfrankfurt
東京公演日本側スタッフ	
技術監督	寅川英司 Eiji Torakawa
照明	ファクター Factor
音響	相川晶 Akira Aikawa
大道具	大津英輔 Eisuke Ozu
小道具	栗山佳代子 Kayoko Kuriyama
翻訳	萩原ヴァレントヴィッツ健 Ken Hagiwara-Wallentowitz
主催	フェスティバル/トーキョー Festival/Tokyo
特別協力・助成	GOETHE-INSTITUT JAPAN ドイツ文化センター
後援	ドイツ大使館 Deutsche Botschaft Tokyo

GOETHE-INSTITUT JAPAN ドイツ文化センター

公演/チケット情報

会場　　にしすがも創造舎
チケット料金　　全席自由　一般　4,500 円、学生　3,000 円（要学生証提示）／高校生以下　1,000 円
お取扱い　　フェスティバル/トーキョー（HP のみ）、ぷれいす（電話のみ）、
電子チケットぴあ（P コード：391-399）、イープラス

公演スケジュール

2/26 thu	2/27 fri	2/28 sat	3/1 sun
19:30	19:30	14:00　/ 19:30	17:00

F/Tパフォーマンス　チケット 2008 年 12 月 18 日（木）前売開始　※F/T 参加作品は対象外

■チケット取扱
フェスティバル/トーキョー（HP のみ）　http://festival-tokyo.jp
ぷれいす（電話のみ）　03-5468-8113（平日　11:00-18:00）
電子チケットぴあ 0570-02-9999（Pコード予約）http://pia.jp/t　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外
イープラス http://eplus.jp　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

・指定席の場合、開演時間に遅れたお客様はご指定のお席にお座りになれない場合がございます。
・未就学児童のご入場はお断りさせていただきます。
・受付開始及び当日券の販売は開演 1 時間前、開場は 30 分前からとなります。
・チケットの払戻、観劇日の変更はできません。
・チケット料金には消費税が含まれます。

F/Tパフォーマンスを、選んで観る。全部観る。誘って観る。学生も観る。
フェスティバル/トーキョーならではのお得なチケットでお楽しみください。　※フェスティバル/トーキョー・ぷれいすのみ取扱い

◇F/T 回数券　*選んで観る！*　※お好きな演目を選んでご覧いただけます。（『サンシャイン 63』は対象外）
3 演目　¥10,000　（¥3,333/枚）、5 演目　¥15,000　（¥3,000/枚）

◇F/T パス（13 演目）*全部観る！*　※全ての演目をご覧になれます。（『サンシャイン 63』は対象外）
¥30,000（¥2,300/枚）

※F/T 回数券、F/T パス（13 演目）のお取扱いについて
・2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）
・観劇演目・日時が未定でも購入できます。
・購入後は演目・日時のご予約を受付けます。
・予約なしでも当日ご入場出来ます。但し、満席時はご入場頂けない場合がございます。
・確実にご覧頂くためには演目・日時予約をお勧めいたします。
・回数券・パスはご本人様のみ有効です。

◇ペアチケット　*誘って観る！*
チケット 2 枚分の料金から 10%OFF でご購入頂けます。（例／¥4,500×2 枚＝¥9,000→¥8,100）
※2 名同日時観劇のみお受けいたします。 ※当日券のご用意はございません。 ※『演劇/大学 09 春』は対象外です。

◇学生料金　*学生も観る!*
学生　全演目 ¥3,000（要学生証提示）　高校生以下　全演目¥1,000
※東京芸術劇場中ホール公演は S 席　※当日でもご購入できます。

◇Port B セット券（『雲。家。』『サンシャイン 63』）　¥6,400　（¥3,200/枚）
※ぷれいすのみ取扱　※2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）

3 演目	¥10,000（¥ 3,333/枚）	F/T パス	¥30,000（¥ 2,300/枚）
5 演目	¥15,000（¥ 3,000/枚）	ペアチケット	10%　OFF

フェスティバル/トーキョー09 春　開催概要

名称　フェスティバル/トーキョー09 春
Festival/Tokyo 09 spring

会期・会場　2009 年 2 月 26 日（木）〜3 月 29 日（日）
東京芸術劇場 中ホール 小ホール 1・2
あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
にしすがも創造舎

プログラム　F/T パフォーマンス 14 演目
F/T 参加作品 5 演目
F/T プロジェクト（シンポジウム/ステーション/クルー）

主催　東京都
財団法人東京都歴史文化財団
フェスティバル/トーキョー実行委員会
豊島区、財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

共催　社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター

事業共催　国際交流基金

協賛　アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

助成　財団法人アサヒビール芸術文化財団

後援　外務省、社団法人日本芸能実演家団体協議会、社団法人日本劇団協議会

協力　東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、社団法人豊島法人会

宣伝協力　株式会社ポスターハリス・カンパニー

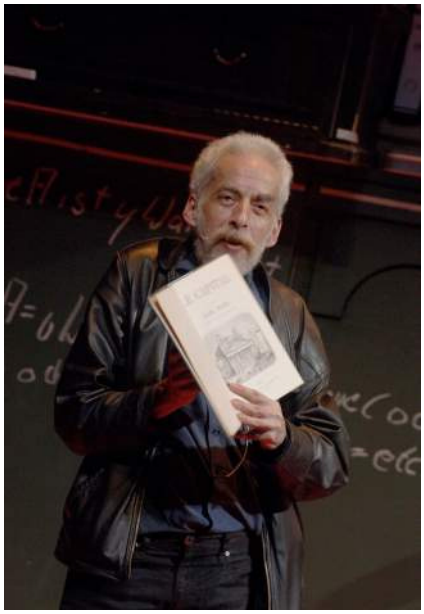
平成 20 年度文化庁国際芸術交流支援事業

提携事業　東京芸術見本市 2009

写真/クレジット一覧

『カール・マルクス：資本論、第一巻』

（c） Sebastian Hoppe



（c） Sebastian Hoppe

（c） Sebastian Hoppe

『ポートレート』 ©Rimini Protokoll
ダニエル・ウェツェル Daniel Wetzel（左）、ヘルガルド・ハウグ Helgard Haug（右）

（c） Rimini Protokoll ／ Hanna Lippmann